

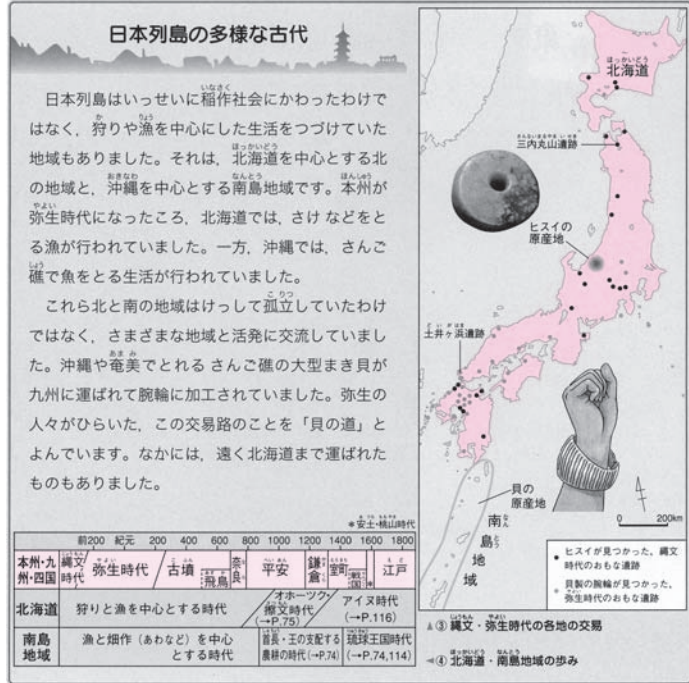
古代日本と東アジア

国立歴史民俗博物館 仁藤敦史



1 はじめに一視角の設定

今回改訂された中学校学習指導要領では、「歴史的分野」の目標として「東アジアのなかの日本」「世界のなかの日本」といったグローバルな歴史理解が重視されている。くわえて「わが国の歴史の大きな流れ」と「時代の特色」の理解が強調されている。このような空間的・時間的に拡大した視野をもち、大づかみに日本史を理解するという学習目標を達成するため古代ではどのような点を留意すべきか以下では述べてみたい。



帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.37

2 古代の特色

原始・古代という時代は、おおむね他の動物と区別される人類の誕生から、現在に連続する基本的枠組みである国家の成立を扱い、年代的には数百万年前から古代国家が変質解体する12世紀までを扱う。他の時代に比較して年代的にも長期にわたり、その歴史的变化も著しい。国家成立以前には、現在の国民国家的な枠組みとは異なり国境や国籍は存在せず、当初には日本列島という地形的な枠組みすら大陸と陸続きであり存在しなかった。奈良時代以降における律令国家の成立以後においてさえ、北海道や沖縄地域はその固有な領土とはなっておらず、本州を中心とした「日本」とは異なる独自の歴史が展開していた点は留意すべき点である。したがって、現在の日本を前提とした「倭」や「日本」というまとまり、外国人とは区別された「日本人」という概念も古代では相対化して考える必要がある。

3 弥生時代の変革

石器や土器を用いていた縄文時代までは、基本的に狩猟や採集を生業としていたため自然環境に制約される側面が強かった。やがて、中国の中原地域が紀元前3世紀に秦の始皇帝により統一され、周辺地域へ文化的な影響を及ぼすようになると、大陸からは稲作や金属器がもたらされ、これにより西日本地域を中心に急速に政治的統一が進むこととなった。しかしながら、日本列島がすべて均質な社会であったわけでもない。東日本の弥生時代前半期は明瞭な政治社会を形成しない農耕文化であり、北や南の北海道や沖縄では、続縄文文化、貝塚後期文化と呼ばれて、古代を通じて農耕社会にはならない狩猟・採集経済を基礎とした独自の文化的発展を遂げている。従来の教科書が語ってきた「通史」は極論すれば日本列島の四分の一の地域を説明しているにすぎないことにな

る。弥生時代は日本列島のなかに異なる文化が枝分かれする時代でもあった。つぎの古墳時代につながる直線的な文化の進化・進歩という側面だけではない、こうした異文化の多様なあり方に注目し、「先進的」と位置づけられてきた西日本の弥生文化を

相対化する視角が必要である。近年では、縄文時代の社会が変化を必要としない、それなりに豊かで安定したシステムであったとの評価もなされるようになった。さらに、これらの文化は孤立したものではなく、ヒスイや貝製品の出土からうかがわれるように、相互

に交易により交流していたことも見落とすことはできない。一方で、西日本の弥生文化は現在の国境たる対馬海峡を超えて、朝鮮半島南部の支石墓に代表される文化と共通点が多い。

水田稲作農耕の開始は単に食料としての側面だけでなく、灌漑や開発にともなう金属製品の需要増大と関連した交換財としての経済的役割、さらには富の蓄積や租税としての政治的役割など、歴史的に多様な側面をもち、米を安定的に大量に作ることが共同体の再生産において重要視された。しかし、政治的な首長が誕生すると本来は共同体の再生産のためであった農耕儀礼や交易が、首長の富に転化することとなった。

4 中国の冊封体制

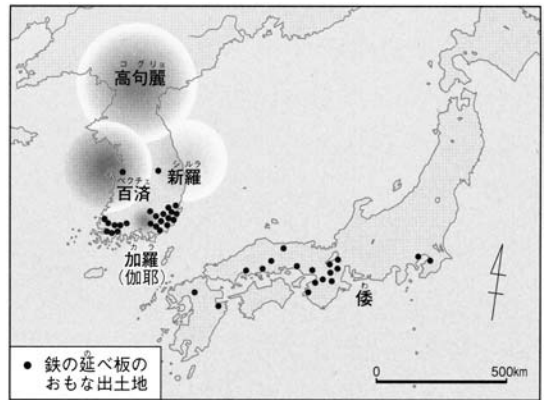
古代において倭国(日本)の歴史は、中国が周辺諸国を政治的、文化的に自己の影響下におこうとする動きと密接に関係していた。倭人の記載が、中国の史書に初めて登場するのは紀元前の前漢時代である。これは、前漢王朝の勢力が朝鮮半島に進出し、楽浪郡を設置したことの結果であり、定期的な朝貢関係として記載されていることは重要である。このように、倭国の動向が以後も基本的に中国の歴史書に書かれていることは、倭国の形成が東アジア諸国との深い関係において進行したことを示している。中国の歴代王朝は周辺諸国との外交において伝統的に王朝内部の君臣関係である封建制を拡大して用いた(冊封体制)。中国皇帝

と君臣関係を結んだ諸国の王は、皇帝に上表する国書を印章で封印しなければならなかった。いわゆる倭奴国王がもらった金印や卑弥呼の「親魏倭王」の印もこうした目的に使用されている。中国



▲① 奈良県の古墳から出土した鉄の延べ板(東京都 宮内庁書陵部蔵)

帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.38



▲③ 3～5世紀の朝鮮半島と倭

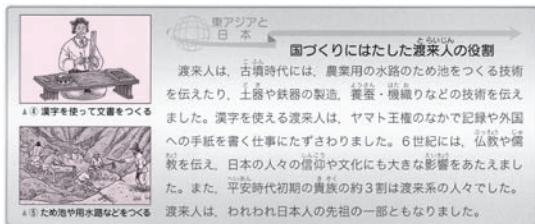
帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.39

との外交関係は漢字や漢文の習得が前提とされ、東アジアにおける漢字文化圏の形成は、漢字使用の政治的事情を背景としている。わが国における漢字文化の伝統は、単なる文化伝播として考えるべきものではない。

卑弥呼の時代には国内の統一を維持する手段として魏王朝の権威や銅鏡の獲得が目的で朝貢した。また、倭の五王による南朝への朝貢の背景としては、倭国内部では生産できない農耕具や武器に用いる鉄素材の朝鮮半島からの安定的入手が当時の豪族たちにとっては大きな関心事であったこと、その求心力によりヤマト王権を中心とする国内的な統合が急速に達成され、前方後円墳がそのシンボルとなったこと、ヤマト王権(律令制以前の政治的関係は、大王と諸豪族との貢納・奉仕を媒介

とした王を中心とする人格的關係が基本であり、充実した機構をとまなわれないこと、現在の奈良県地域を示すヤマトの地名表記は、歴史的に多様であり、かつ国名と同じであることから「大和朝廷」ではなく「ヤマト王権」の用語を用いた)は鉄などの先進的文物や技術者(渡来人)の安定的供給を維持するため百濟からの申し出によりたびたび出兵したことなどが指摘でき、朝鮮半島での優位を保つ必要から軍政権をもつ將軍号を承認してもらうため中国と交渉したと考えられる。

一方、先進的な技術をもった渡来人たちは、戦乱を避けたり、外交使節として渡来し、倭国の国づくりに貢献しただけでなく、信仰・文化などにも大きな影響を与えている。平安時代の貴族のうち少なくとも約三分の一が渡来系(諸蕃)とされていることを重視するならば、現在の日本人の先祖と位置づけることも可能である。



帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.42

5 律令国家の形成と対外関係

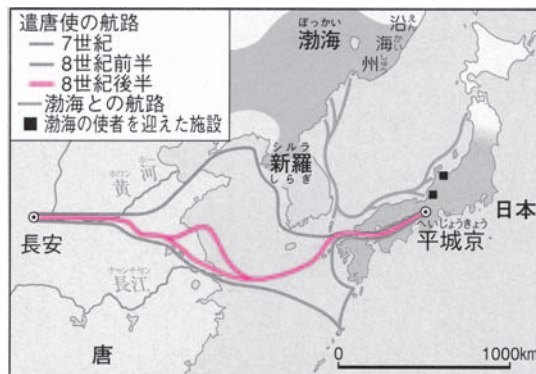
7世紀後半に律令国家や都城が形成される要因も東アジアの政治情勢が関係している。倭国や大王などの名称は、律令国家の成立にともない、七



▲⑥ 白村江の戦い

帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.43

世紀の後半に天皇や日本などの名称に改められた。こうした変化は、百濟王一族が百濟滅亡後、倭国に亡命し倭王の臣下に位置づけられたことや、統一新羅に対する我が国の強い蕃国視と無関係ではない。唐と新羅の連合軍に白村江の戦いで大敗した倭国は、大量の百濟貴族の亡命を受け入れ、朝鮮式山城の造営など対外防衛を固め、唐・新羅軍の侵攻にそなえるとともに、さらに彼らを官人層の中核に取り込み、律令国家への歩みを早めることになった。編戸制度の意義が、兵士を出し得る均等な「戸」を権力的に創出することにより、一戸一兵士制すなわち、五十戸＝一里から交替で50人の兵士を選抜するシステムであったことに端的に表れているように、律令制国家への転換は、強大な軍事力の創出過程でもあった。対外的な危機を背景とする律令制の強化は、軍国体制の創出と言い換えることが可能である。新羅に対する対外的な強硬方針および律令体制の強化という政策基調は、新羅との国交が断絶する八世紀の後半まで維持される。まさに、軍団兵士制が八世紀末に廃止されるのは象徴的である。やがて九世紀以降は、商人や僧侶が往来し、貿易を主とする関係に転換する。



帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.45

一方、9世紀末に、遣唐使の派遣が中止されると、唐との正式な国交はなくなり、10世紀初頭に唐は滅亡する。こうした動向により、西アジアや中国の直接の影響をうけた天平文化とは異なる日本独自の国風文化が生まれることとなった。国風文化では漢字から「ひらがな」「カタカナ」が発明されるが、同じころ、中国の周辺諸国でも西夏文字や契丹文字などが生まれている。唐の衰退、滅亡にとまなう、民族意識の成立が考えられる。